

# 日本語の用言句相当慣用表現の分類とその応用

2M-5

亀井 真一郎  
NEC 情報メディア研究所

## 1. はじめに

近年の機械翻訳技術の発達により広範な文書の翻訳が可能になりつつある。しかし現実の文書処理には、単語単位の辞書だけでなく、特定の単語同士の決まった組合せ全体が特別な意味を表す句(慣用表現)の取り扱いを充実させる必要がある。

従来、日本語の慣用表現には様々な種類の存在が指摘されている[1, 2, 3, 4, 5]。関連する用語も「熟語」「連語」「換喩」「比喩」「機能動詞表現」など数多い。そこで本稿では、特に用言句相当表現を中心にして、意味的な成り立ちの観点から慣用句を分類し慣用表現の「分布図」を作成した。例えば「あぐらをかく」という句は慣用的と感じられる読みを二つ持つ(1)足を組んだ座り方、(2)いい気な態度でいる様)が、それらの違いが図中の位置として視覚化できた。また関連用語を図中で位置づけることもできた。さらにこの分布図が慣用句の収集および構文的制約の判断の際にも役立つことをシミュレーションしたので報告する。

## 2. 日本語慣用表現の成立要件

慣用句の成立要件として次の3つの要因を考えて作成した分布図が表1である。それぞれを意味空間の3つの座標軸になぞらえて、慣用句の種類を便宜的に(010)類、(020)類、等と名付けた。表中、(000)類は一般句であり、それ以外が種々の慣用句の類を表している。

1. 体言部(x軸)：体言の意味が基本義か(x=0)、派生義か(x=1)に関する軸。
2. 用言部(y軸)：用言の格スロットが広い語義を受け付けるか(y=0)、特定の語類のみを許すか(y=1)、単一の語だけと結合するか(y=2)という、体言と用言の結合に関する軸。
3. 表現全体(z軸)：表現全体が新たな意味を生じることに関する軸。

## 3. 各慣用句類の特徴

この分布図の各類には次のような特徴がある。

1. (000)類 [通常句]：体言と用言の通常の組合せからなるもので慣用表現ではない。例にある「足を洗う」は文字通りの意味である。

表 1: 日本語の動詞句相当慣用表現の分布図

		体言部 (⇒ x 軸)		表現全体 (z 軸)
		基本義	派生義	
用言部	一般義	(000)類： 通常句 (literal) 頭を使う 株が上がる 足を洗う (しのぎを削る) 電話がある 首をひねる	(100)類： 換喩 頭を使う 株が上がる	z 類： 比喩的慣用句  株が上がる 足を洗う しのぎを削る  首をひねる
		(010)類： 制約不整合 意見をぶつける 声はずむ	(110)類： 換喩 + 不整合  腹をこわす	
	格スロットの語義制約 (⇓ y 軸)	特定類	(020)類： 特定類 (a) 医者 (内科 ...) にかかる 便り (連絡 ...) がある  特定類 (b) 睡眠 (休息 ...) をとる 攻撃 (圧迫 ...) を受ける	(120)類： 換喩 + 特定類  電話がある
	単一語	(030)類： 単一語 (a) あぐらをかく  茶を点てる  単一語 (b) 功を奏する 端を発する  単一語 (c) 命を取りとめる 口をつぐむ	(130)類： 換喩 + 単一語  口をきく	あぐらをかく 口をきく

2. (010) 類 [制約不整合]: 用言の語義制約と整合しない体言の組み合わせが固定化したものである。例えば「声ははずむ」では「はずむ」の制約「物理的具體物」と整合しない「声」が結合している。
3. (020) 類 [特定類]: 特定の体言の一群と結合することで用言の意味が一つに定まる点に特徴をもつ。動詞「かかる」は多数の意味を持つが、「医者」の類(内科/外科 etc.)と組合わさることで意味が一意に定まる(特定類(a))。同類として、ある種の動作性体言と結びつく特定の動詞が助動詞的な役割をする一群がある(特定類(b))。例えば「攻撃を受ける」の「受ける」は受身の助動詞と同様に働き、全体で「攻撃される」とほぼ同義となる。このように元の実質的な意味が薄らいだ動詞は機能動詞と呼ばれる[1]。
4. (030) 類 [単一語]: 体言がほぼ唯一に固定されている一群である。「あぐらをかく」の「かく」がこの意に用いられるのはこの表現に限られる(単一語(a))。同様な表現であるが、「功を奏する」の場合には体言「功」が、また「口をつぐむ」の場合には用言「つぐむ」が、この表現でだけ使われる語である点が特殊である(単一語(b)、(c))。
5. (100) 類, (110) 類, (120) 類, (130) 類 [換喩]: 「頭を使う」という句を「考える」の意で用いるとき、体言「頭」は換喩の意味である「頭の機能」を表している点で、通常句と区別される。
6. z 類 [比喩的慣用句]: 構成要素の元の意味はほとんど残っており、全体が新しい意味をもつ典型的な慣用句である。中には「しのぎを削る」のように元々存在した文字通りの読みが失われ、慣用句としてのみ機能するようになった例もある。  
「首をひねる」という句はその動作が シグナルとして用いられるところから「不思議がる」の意となる。このような象徴的動作に起因した表現も比喩的慣用句の一つである。  
また、直喩の中で慣用的に用いられる表現も「後ろ髪をひかれる(ような名残惜しい思い)」「手にとる(ようによくわかる)」など多数ある。直喩と慣用句とは以下のような「直喩→暗喩→比喩的慣用句」という過程をたどって関係するものと考えられる。

段階	表現	直喩マーカ	様態	事柄
1. 例え	しのぎを削る	ような	激しい	戦い
2. 直喩	しのぎを削る	ような	—	戦い
3. 暗喩	しのぎを削る	—	—	戦い
4. 独立	しのぎを削る	—	—	—

個々の表現により上記のどのレベルにまで独立度が進んでいるかに差があるが、その度合いをz軸の座標に相当させることで、これらの表現も比喩的慣用句の中で分類表示できる。

## 4. 分布図の応用

### 4.1. 表現収集の効率化・高品質化

慣用句が意味的なまとまりである以上、その収集に際しては最終的には人間の判断が必要である。従って句の大量収集の効率化は大きな課題である。表1の分布図を用いれば「慣用」の種々の要因が視覚的に把握できるので、一つの表現が複数の慣用的読みを持つ場合の収集もれの危険が低減できるなど、収集品質の向上が期待できる。また現在までに収集した慣用表現を分析した結果、以下のような性質を見出すことができた。これらの性質と分布図とを組み合わせることで慣用表現大量収集がより効率化・高品質化できるものと考えている。

1. 和語動詞: 慣用句を構成する動詞は「(汚名を)返上する」等ごく少数を除く大部分が、和語動詞と「愛す/する型」「信じる/ずる型」「熱す/する型」活用の「和語化漢語動詞」である。
2. 機能動詞表現: 新聞などの一般文書では「連絡をとる(=する)」「攻撃を受ける(=される)」といった機能動詞表現の出現頻度が高い。

### 4.2. 構文的文法操作の制約との関係

慣用表現は構文的文法操作の制約が大きく、その度合は表現ごとに異なるので、個々の辞書に制限を個別に記述しなければならない。しかし、分布図に示した慣用表現の各々は、構文的文法操作の制約とも強い相関をもつことが予想されるので、判断・記述の軽減が期待できる。例えば、体言の意味が元のまま保持されている(010)類、(020)類などでは、体言に対する修飾、連体節化などの操作は通常句と同様に許されると思われる。用言がほぼ元の意味を保っている類では、自動詞/他動詞変換、受身化、使役化などの可能・不可能も原則として元となる語と同様であると考えられる。

## 5. おわりに

用言句相当の慣用表現をその意味的な成り立ちの観点から分類し、全体を分布図の形に可視化した。種々の慣用的表現を図中の位置の違いとして表現でき、慣用表現を収集する際の品質を高めることができる。今後は、この分布図を元にして表現の大量収集を効率的に行なうこと、および個々の慣用表現がもつ構文的文法操作の制約の判断・記述の効率化を図ることが目標である。

## 参考文献

- [1] 村木 新次郎: 「日本語の機能動詞表現をめぐって」 国立国語研究所報告 65, pp.17-75, 1980.
- [2] 宮地 裕: 「慣用句の意味と用法」, 明治書院, 1982.
- [3] 奥 雅博: 「日本語慣用表現の分析と日英翻訳への適用」, 情処研究会資料, 87-NL-62-2, 1987.
- [4] 首藤 公昭 他: 「日本語の慣用表現について」 情処研究会資料, 87-NL-66-1, 1987.
- [5] 森田 良行 他 編: 「ケーススタディ 日本語の語彙」, 桜楓社, 1989.